

浅瀬の海底に鎮座して、まるで飼い犬のように
ダイバーの顔を見上げる姿が何ともキュート

都会の アシカ

西オーストラリア
カナック島

WEB-LUE Vol.2でも紹介した、西オーストラリア、
パースのオーストラリアアシカたち。
そのアシカたちに2007年1月に再び会いに行く機会を得た。
今回は、ダイビングをすることなく、
アシカたちの撮影に1週間の時間をかけた。
他では見られない、彼らの生息環境を明らかにする。
そして新たに制定された
矛盾した保護ルールに疑問を投げかける。



Photo & Text : **Takaji Ochi**
Special Thanks : **Dive adventures World, Ocean Safari**

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます

Web-lue 2007. Spring

 Information Link <http://diveadventures.watrandive.com/> 関連情報HPへ

不思議な生息環境を形成する カナック島のアシカたち

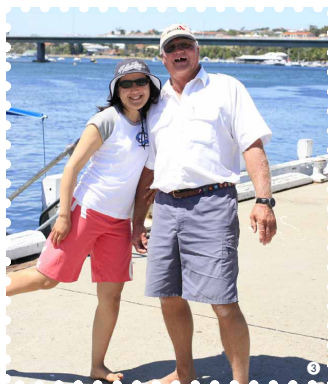
西オーストラリアの玄関口、パース。このパースから海岸線に位置する港町、フリーマントルに移動してポートに乗りこみ、アシカたちの生息する小さな無人島カナック島を目指す。といっても、その島は船足の遅いポートでも30分程度で着いてしまう。スピードポートなら、ものの15分くらいで着いてしまうような距離だ。

都会からそんなに離れていない小さな島に、オーストラリアアシカたちのコロニーがある。この島を訪れるのは、今回(2007年1月)で5回目。以前は特に保護ルールも無く、自由にアシカたちとの交流を楽しむことができた。しかし、久しぶりに訪れてみると、西オーストラリア州の環境保護を担当するCALM (Department of Conservation and Land Management) によって、保護のためのルールが制定されていて、以前のように自由には遊べなくなっていた。その内容は以下に触れることにして、まずはアシカたちとの遭遇体験をつづっていくことにする。島の名前はカナック(Carnac island)島。以前はこのオーストラリア西海岸を移動するクジラたちを捕獲する、捕鯨の前線基地であったと聞いた。当時からオーストラリアアシカたちはこの島に生息していた。しかし、不思議なのは、この周辺海域に生息しているアシカたちはオスしかないということ。おかげで、ハーレムを守るブルと呼ばれる攻撃的なオスに威嚇されることもなく、遊び好きのオスのアシカたちと水中で戯れることができる。



彼らは、17ヶ月周期の交尾シーズンを迎えると、300キロほど北にあるメスト、母親離れする前の子アザラシのコロニーがあるジュリアンベイという海域の島々に生息するメスたちの元を訪れ、3ヶ月ほど過ごす。そして、交尾を終えたとまた、カナック島をはじめとする、パース近海の島々に戻ってくるというのだ。何故17ヶ月周期なのかも疑問だ。

全てのオーストラリアアシカが同じような行動を取るわけではなく、ほとんどのコロニーがオス、メス共同で生活をしているようだ。つまり、このカナック島周辺のアシカだけが、このような変わった生息環境を形成しているという。今回、アシカ研究の専門家に会い、何故そのような環境を形成しているのかと問うたが、彼らにもその理由はわからなかった。



- 1 カナック島のビーチ前には、週末になると沢山のレジャーボートが詰めかける
- 2 パースは世界で一番美しい都市とも言われる、西オーストラリア州の玄関口
- 3 陽気なクルーたちが、アシカとの出会いをサポートしてくれる
- 4 好気心旺盛な若いアシカたち。ずっとスキングイパーにまわりついて離れないときもある

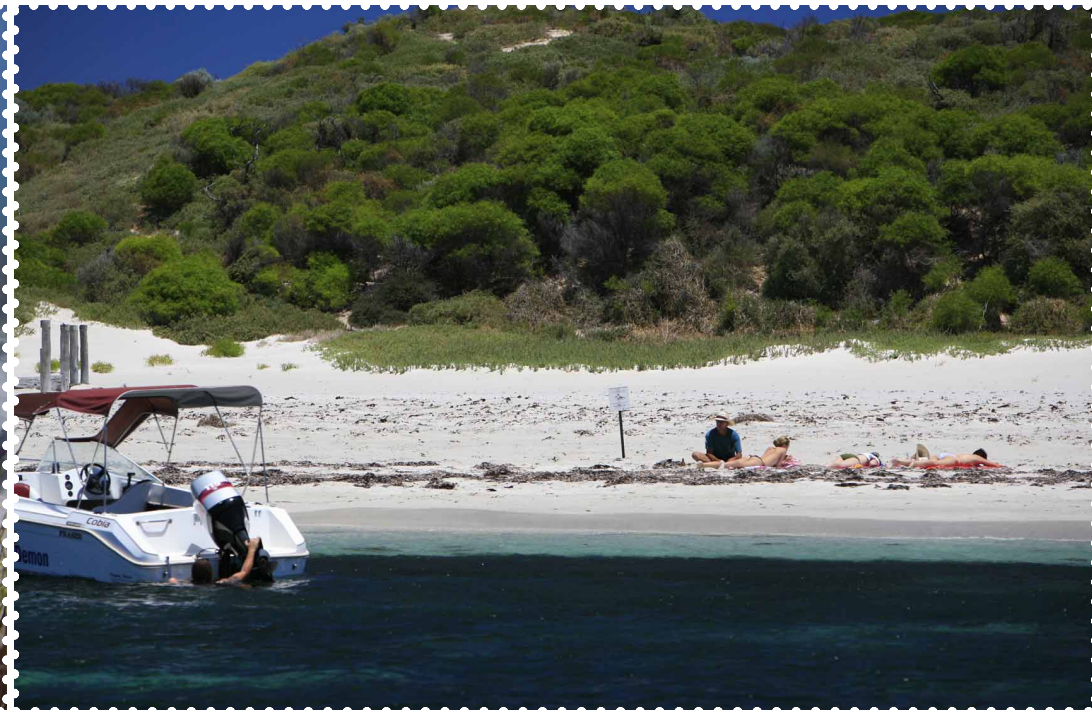
まるで飼犬？
人懐っこさに
みんなメロメロ。





好奇心の
カタマリ
参上！





生息環境を
尊重しつつ、
アシカたちに
会いに行こう！



アシカたちの人懐っこさは、飼いだぶり

とにかく、このアシカたちは、都会に近く人間慣れしているだけでなく、このようにオスだけで生息しているために、メスや子供を守る必要が無い。いたってお気楽な生活を送れる環境にあるわけだ。

そのため、とにかく好奇心が旺盛で、ビーチで寝そべっているアシカたちを浅い海中にしゃがんで待っていて、水面をばしゃばしゃとたたくと、退屈していたアシカたちが「待ってました!」とばかりに遊びにきてくれる。その様子はまさに犬そのもの。「シーライオン」というよりは「海中のゴールデンレトリバー」と名づけなおしたくなるくらいじゃれっぷりだ。特に母親から独立してこの島にやってきたばかり(生後3年くらい)の若いアシカたちのおとぼけ顔は最高にかわいい。しかも毛並みが白っぽくて、表情もはっきりしている。カメラハウジングの先端に鼻先を押し付けてきたり、フィンをあま噛みして、欲しがったり、人の顔に鼻面をおしつけて、まるでキスするような行動を延々と見せてくれたりと、「野生動物と遭遇」しているというよりは、「飼いだぶり」と言う表現の方が正しいくらいの人懐っこさに、皆夢中になって一緒に泳いだり、撮影を楽しんだりしていた。



- ①愛嬌があると言っても、彼らの歯は鋭い。機嫌を損ねるようなことは僕ももう
- ②水中で「ばふ!」と鼻からエアを吹き出す仕草は滑稽でかわいい



アシカを保護するための、矛盾した環境保護ルール

今回の来訪で、僕たちが一番気になったのが、新たに制定されていた環境保護ルールだった。狭いビーチの中央には、ビーチを左右に分断するためにCALM(Department of Conservation and Land Management)によって立てられた杭が並ぶ。海側から向かって右側は、アシカたちのサンクチャーとして、そして渡り鳥のアジサシたちがビーチに卵を産んでいるために、看板が立てられ、立ち入りが規制されていた。しかし、ほとんどのアシカたちは、サンクチャーに定められている右側でなく、左側のビーチにごろごろと寝転んでいた。週末になると、近隣の都市から多くのプライベートボートがやってきて、人々が島に上陸して、ビーチパラソルを広げたり、ビーチボールで遊んだり、寝そべるアシカたちの前で記念写真を撮影したりしている。驚いたことに、ビーチでカイトサーフィンの大きなカイトを広げている若者までいた。しかも、その光景は立ち入りが規制されているはずの杭の右側でも行われているのだ。何故かビーチの左側への上陸さえも許してもらえない僕たちには、その光景が奇妙に見えるだけでな

く、腹立たしくもあった。観光用のボートだけがCALMが数年前から取り決めたルールを守り、ローカルの人たちは、まったくおかまいなしにルールを無視してアシカたちの生息圏を侵害している。週末、ボートで見回りにやってくるCALMの職員が、そういう人たちに注意を促しているのだが、ボート上から眺めている僕には、若い女性たちを弱気にナンパしているようにしか見えなかった。島に設置された監視カメラも、これでは何の意味があるのかわからない。しかし、数年前までは特に規制もなく、普通に僕たち観光客も上陸してアシカたちの陸上での撮影を行っていたのだ。だからというわけでも無いだろうけど、アシカたちも人間が接近してもまったく気にせずビーチに寝そべっていた。ただ、以前に比べて週末にカナック島を訪れるプライベートボートの数は間違いなく増えているようだ。今回も70隻近くのボートがこのビーチの目の前に停泊していた。都会の近くで野生動物に会えるのは恵まれた環境ではあるが、フロリダのマナティー同様、手軽に訪れることのできる場所というのは、しっかりとした保護ルールと、

それを守る意識を訪れる人々が持たなければ、人と野生動物の共存関係に、多くの問題点が浮上してくるのは間違いない。今はルールを地元の人に認知してもらうことが急務のようだった。それでも、僕たちは、観光業者とCALMとの友好的な関係を崩さないように、極力CALMとボートキャプテンの指示に従って撮影を行った。もちろん、キャプテンの方も、僕たちが撮影目的であることを認識しているため、CALMに事情を説明し、平日のプライベートボートがまったくない状況下での、水中でのアシカとの接近距離を大目に見てもらったり、一人だけなら、という条件つきで上陸させてもらい撮影を行ったりしていた。週末当然のように上陸していた人々の様子を知っている我々からすると、カメラを持って遠慮がちにビーチを歩く僕らの姿の方がこっけいに見えてならなかった。今後、このルールがますます厳しくなることも予想される、仕方の無いことかもしれないが、できれば以前のように、自由にアシカたちと遊べる環境がいつまでも持続できることを願っている。